

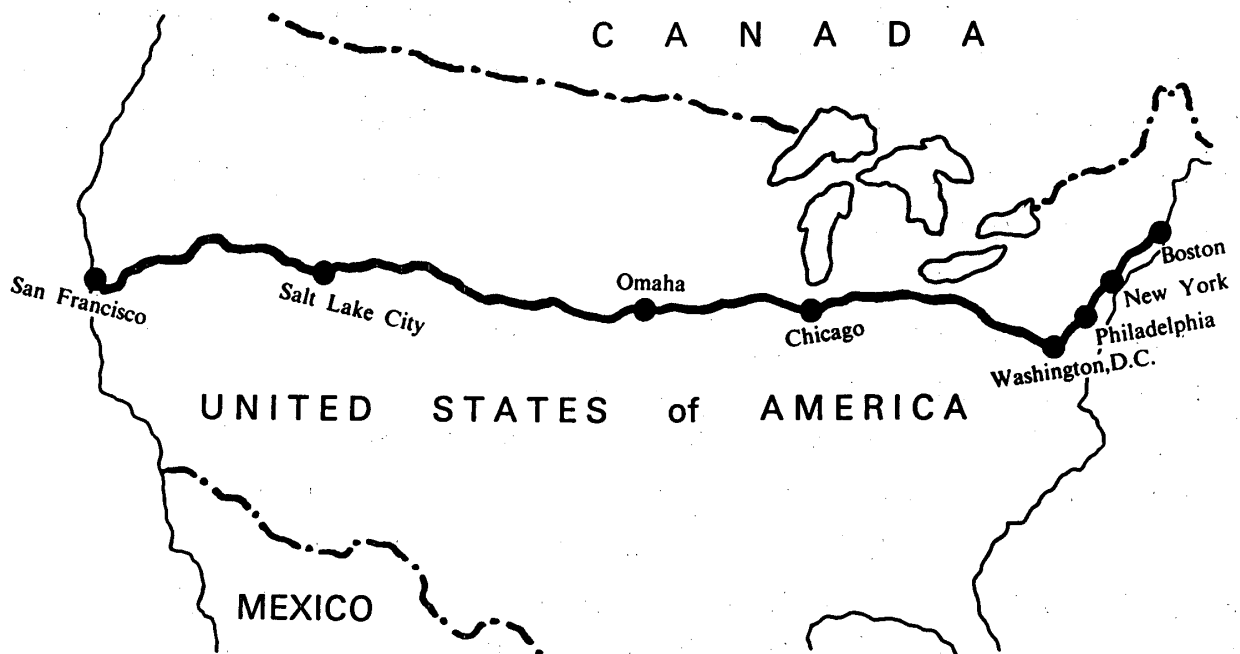
岩倉使節団の見たアメリカ合衆国

高 島 涼 子

序

1. 岩倉使節団及び「特命全権大使米欧回覧実記」について

- 1. 1 岩倉使節団について
- 1. 2 「特命全権大使米欧回覧実記」について



2. 岩倉使節団の見たアメリカ合衆国

- 2. 1 西 部
- 2. 2 東 部
 - 2. 2. 1 ワシントン
 - 2. 2. 3 北部巡覧
 - 2. 2. 3 フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン
- 2. 3 共 和 政
- 2. 4 キリスト教
- 2. 5 岩倉使節団のアメリカ合衆国観

序

明治4年11月12日(旧暦)、横浜港を出発した岩倉具視を全権大使とする使節団——岩倉使節団——は、その後世に与えた影響により、近年注目を浴びている。

明治維新を近代の初めとする日本は、現在の日本人があたりまえとしている多くの西洋の文化、文明を明治時代にとり入れ初めたのであり、それらの文化、文明は百年余の歴史しかもっていないのである。諸外国との接触も鎖国が解かれてからのことであり、その最も初期の頃に、当時の政府首脳が1年10カ月にわたり、全くの異文化の土地を訪問し、視察して歩いた事実は、その視察から多くの西洋の制度や思想がとり入れられた故に重要な意味を持つ。

その使節団が最初に訪れた国がアメリカ合衆国である。合衆国はその歴史のユニークさから、日本からはヨーロッパよりも遠い国とさえいわれるが、使節団はそのユニークさをどのようにとらえたのであろうか。民主主義と訳される *democracy* を、自治の精神をどのようにとらえたのであろうか。そして、その後の日本の歩んだ道はまさしく帝国主義の道であったのであるから、合衆国の *democracy* はどのような理由で忌避されたのであろうか。

図書館という現象あるいは制度を考える時、その背後には風土によって培われた思想、国民性があり、それらの違いによって制度が異なり、あり方が異なる。その多くを合衆国に負っている日本の図書館界にあって、最初の公的な接点とも言うべき岩倉使節団の合衆国観をとらえ、日本と合衆国の違いを認識する一つの手がかりとすることは、両国の図書館事情を知る上でわずかも助けとなるのではないだろうか。

Ⅰ．岩倉使節団及び「特命全権大使米欧回覧実記」について

Ⅰ．Ⅰ 岩倉使節団について

使節団派遣の構想は、すでに1869年（明治2年）フルベッキ（Verbeck, Guido Herman Fridolin 1830—1898）によるブリーフ・スケッチ *Blief Sketch* * においてかなり詳しく示されている。フルベッキはオランダ系アメリカ人で、1859年（安政6年）来日した宣教師であり、1869年政府雇いとなって、開成学校に勤務し、また明治初年の立法機関である公議所に列席、最高立法機関の諮問に応じた。彼が政治の上で最も貢献したのは明治初期の4、5年間で、政府の最高顧問として、岩倉具視の信任の下に、近代化政策推進に大きな働きをなした。¹

彼は、このブリーフ・スケッチの中で次のように述べている。

西欧文明を完全に評価するためには目で見、肌に感じとるべき何物かがある。……その文明を完全に理解しようとすれば、どうしても直接に体験することが必要である。……西欧諸国の現状を十分に理解するようになるには、根底にある条理を知るだけでなく、実際の活動を観察することが必要である。²

派遣人員は、岩倉具視を全権大使、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳を副使とする、当時の政府における実力者を主要なメンバーとした、計50余名の使節団であった。この使節団の平均年齢はほぼ30才であり、最年長の岩倉具視でさえ47才であった。

*フルベッキが明治2年5月2日付（陽暦1869年6月11日）で大隈重信にあてて送った意見書であり、当初の大隈重信を全権大使とする構想が後に岩倉具視に変わり、岩倉もこのフルベッキの意見書をもとに使節団を構成した。

使節団の目的は、条約改正の予備交渉及びフルベッキの提案した各国の文物調査であったが、条約改正に関しては、列国の強硬な態度にあって交渉は成立せず、事実上、文物調査のみが使節団の目的となった。

明治4年11月6日、三条太政大臣の主催による送別の宴が催され、使節一行に、三条太政大臣は次のような送別の言葉を送っている。

行ケヤ海ニ火輪ヲ転シ、陸ニ汽車ヲ輾ラシ、万里馳駆英名ヲ四方ニ宣揚シ、無レ恙帰朝ヲ祈ル³。

1. 2 「特命全権大使米欧回覧実記」について

「特命全権大使米欧回覧実記」（以下「実記」と略する）は、当時権少外史であった久米邦武の編修により、明治11年に刊行された、岩倉使節団の報告書である。編者久米邦武は佐賀藩出身の和漢学者であり、「実記」編修後は、考証史学者として明治史学の基礎を築いた。

「実記」は、岩倉使節団の報告書ではあるが、他の公式報告書とは違い、

日日目撃耳聞セル所ヲ筆記ス、……本編ハ大使公務ノ余、及ヒ各地回歴ノ途上ニ於テ総テ覧観セル実況ヲ筆記ス、……故ニ使節ノ本領タル、交際ノ応酬、政治ノ廉訪ハ、反テ之ヲ略ス⁴。

とその例言にあるように、使節団一行が見聞した事を記録したものである。政治・外交等の報告を略し、観察に徹したため、使節団一行の驚き、不審、賞讃等がそのまま読む者に伝わり、明治初期の政府実力者の西欧体験報告として、文化史的、思想史的にも意義深いものとなっている。

瀛車其都ニ達シ、僅ニ笈ヲ「ホテル」ニ弛ムレハ、回覧即チ始ル、昼ハ輪響瀛吼ノ際、鉄臭煤氣ノ間ヲ奔ル、烟埃満身ニテ、瞑ニ及ヒ方ニ帰レハ、衣ヲ振フニ違アラス、宴会ノ期己ニ至ル、威儀ヲ食案ニ修メ、耳目ヲ観場ニ倦ラシ、子夜ニ寐牀ニ就キ目ヲ覚セハ、製場ノ迎伴人己ニ至ル、故ニ珍異目ニ充チ、奇聞耳ニ満チ、盛饌口ニ饜飫スルモ、神倦筋疲ル、ニ当リテハ、飲水曲肱ノ一快ヲ望ムトモ、国ノ交誼ヲ欠ヲ奈何セン、加フニ寒暑ノ変化異常ナル、羸質ノ人、殆ト甚ル能ハス⁵。

というハード・スケジュールの下に、彼らがその使命に燃えて、何を合衆国にみてきたのか、「実記」によって彼らの足跡をたどっていきたい。

注1. お雇い外国人 11 政治・法政 梅溪 昇著 東京 鹿島研究所出版会 昭和46 pp. 25-28

2. 同上 pp. 244-245

3. 岩倉使節団の研究 大久保利謙編 東京 宗高書房 昭和51 p. 184

4. 米欧回覧実記-久米邦武編 田中彰校注 東京 岩波書店 1977 pp. 9-10

5. 同上 p. 12

2. 岩倉使節団の見たアメリカ合衆国

2. 1 西 部

岩倉使節団は22日間の太平洋航海の後、12月6日（陽暦1872年1月15日）サンフランシスコに到着した。

サンフランシスコは、1871年当時、14万5千人（1860年には5万7千人）の合衆国における10

番目の大都会であり、最初は金銀鉱によって起こり、現在では太平洋航路の要として、世界でも重要な港の一つであると「実記」は記している。¹

使節団一行が宿泊したモントゴメリー街のグランドホテルの様子描写は、第二次大戦敗戦後の日本人が、映画やテレビの画面を通して知った合衆国の富への驚きと共通している部分があり興味深い。

大鏡ハ水ノ如ク、氈氍^{カーベット}ハ華ノ如ク、上ニ気燈^{ガス}ヲ鈎下シ、昼ハ稜角^{ういかく}ノ玻瓈^{ビードロ}七色ヲ幻シ、贗^{マダヒ}金^{キン}粉^{ノコ}ノ光ト相射ル、夜ハ螺旋^ネヲ弛^{ゆる}メテ火ヲ点スレハ、五曜七曜環厘^{メグリ}シテ、光ヲ白玉ノ中ニ輝ス、窓ニハ線縞^{レース}ノ幔^{とばり}ヲ掛ケ、霞ヲ隔テ花ヲ見ルカ如シ、其小房モ亦我八畳ノ室ニ比スヘシ、寢床^{スプ}ハ螺旋^{リン}ノ鉄ニテ其底ヲウク、茵蓐^{しとね}穩ニシテ身ニサハラス、衣ヲ掛ルニ衣箱アリ簞笥^{なんす}アリ、顔ヲ洗フニ水盤アリテ、機ヲ弛ムレハ、清水^{ゆる}迸り出ツ、奴婢ヲ呼ニ電線^{でんせん}アリ、指頭^{さき}纔ニ触レハ、鈴聲自歩ノ外ニ鳴ル、案^{あん}アリテ書スヘク読ムヘシ、鏡^{かがみ}アリテ鑑ムヘシ、石鹼^{サボ}帨^ン巾^{てぬぐい}引火^{マツ}嗽^チ碗^{そう}火^{わん}罐^{ストーブ}水瓶便器^{きまつ}ノ瑣末^{さまつ}マテ各房ニ皆備レリ²。

9日より市内の見学が始まり、約2週間に渡って、馬車製作場、毛織物工場（工員の内訳は白人 100名、中国人 240名、日本人 2名）造船所、製鉄所、鉱山機械製造場、鉱山、近郊の村々及び大邸宅、女学校、小学校、電信機局、オークランドの小学校、兵学校、盲啞院、大学、馬具製造所、港の倉庫等を見学している。もちろんその間には、観劇や舞踏会、サンフランシスコ湾遊覧、競馬場の見学等レクリエーションも含まれていたが、使節団一行にとっては、すべてが日本との比較において考察の対象になったであろうことは容易に推測できる。たとえば公苑^{パーク}を見ても、東洋と西洋の相違について触れざるを得ない。日本には park という概念は欠如していたのであるから、「実記」の編者は、

東西洋ノ風俗相反シ、外貌ハ相肖タルモ、其注意ノ異ナル、毎ニ如此モノアリ、採風ノ士ノ能注意スヘキ所ナリ³。

と記している。

使節団は盲学校における手話や話唇術、小学生の昼食の内容及び唱歌の効用に至るまで関心を持ってサンフランシスコの滞在を終え、12月22日（陽暦1872年1月31日）まずソルトレーク・シティに向けて出発、大陸横断の旅が始まったのである。

一行の汽車は寝台車で「甚タ便利ナル車製ナリ」⁴と記されている。途中、精神病院、サクラメントにあるカリフォルニア州の議事堂を見学、シラネヴァダ山脈を越え、ネヴァダ州に入り、12月26日ソルトレーク・シティに到着、以後ロッキー山脈を越え、ネブラスカ州のオマハに至るまで、西部の荒野を走る。

使節団の進んだルートは、サンフランシスコからワシントンへという、フロンティアの進んだ方向とは全くの逆であった。1890年のフロンティアの消滅にはまだわずかながら間のある時期に合衆国を訪問した使節団は、従って、開拓の歴史をそのまま体験したといえる。フロンティアにおける移民の厳しい風土の中での生活から、徐々に農村化し都市化していく過程を、西部から東部への約一カ月間に渡る大陸横断の旅によって、彼ら自身の目で確かめることができたのである。

ロッキー山脈の大雪のため、ソルトレーク・シティで17日間を過した後、1月17日にオハマに到着するまで、

終日生樹ヲミス⁵。

終日駿走シテモ、會テ目ヲ遮ル樹モナク、又空ニ翔ル鳥モミス⁶。

という厳しい風土にあって、鉄道近くにわずかながら点在する人家の暮しを、使節団は想像したのである。改めて、

米国ノ広漠ナルコト、固リニ耳食ニ飽タレトモ、実況ヲ目撃スレハ、猶驚クニアマリアリ⁷。という思いにかられたのである。

当時、ワイオミング、ユタは州としては認められてはおらず、人口はそれぞれ、9118人、86,786人であった。(ユタの州成立にはモルモン教が問題となっていた。)

荒原ヲ版図ニ収メテ植民シ、後人ニ其功蹟ヲ視セシメルマテ、其間ノ苦心ハ、此ニ類スルモノ多カルベシ⁸。

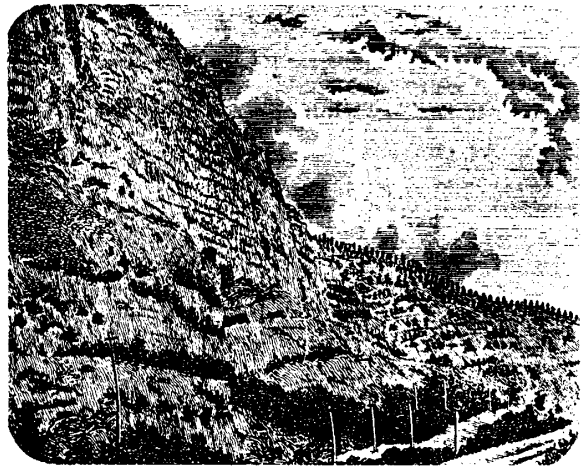
こうした厳しい開拓の原動力を、「実記」は貨幣ではなく、物力、殊に人の力であると考えた。

落機^{ロッキー}ノ荒野ヨリ哈馬哈^{オマハ}ニ至テ、始テ人境ニ

届^{いた}ルヲ覺フホトナレハ、哈馬哈ノ市街モ、固ヨリ岑寂ヲ免レス、顧フニ四十年前ニハ、市高^{シカ}俄^ゴノ大都会サヘ、有カ無キカナリシトキハ、哈馬哈^{オマハ}以東ノ諸州土、ミナ落機^{ロッキー}ノ景況ナリシナルヘシ、然ルニ今市高^{シカ}俄^ゴハ烟花ノ都トナリ、密河谷ノ平地ハ人烟ヲミテ、哈馬哈^{オマハ}モ己ニ都会ヲナセリ、今ヨリ四十年ノ後ハ、哈馬哈^{オマハ}ニモイカナル紅塵^{さく}ヲ簇シ、更ニ「プレーリー」ノ原野ニ、林村鬱茂シテ、移民ノ車ヲ転走スルヲミルニ至ラン歟、如此キ地ヲ過テ、而後ニ益^{ますます}信ス、世界ノ大宝ハ、貨財ニ在スシテ、物力ニ在コトヲ、試ミニ思ヘ⁹。

貨幣は、サンフランシスコ、シカゴ、セントルイス等の大都会には十分あり、しかもカリフォルニア州からネブラスカ州に至る豊かな土地が草が茂るにまかせてあるのは、“物力”が足りない、殊に人口が足りないからだとしている。この人口の不足を補うため、移民を奨励し、アフリカから黒人を奴隷として“獵獲”したものを連れてきてさえいと「実記」は記している。

つまり、使節団は、開拓を国を富ませる一つの手段とみている。日本との対比において、それは明らかになる。当時の日本と合衆国はほぼ同じ人口であった。歴史は日本の方が百倍長く、土地は百分の三にも及ばないのに、「上下貧弱ヲ免レサルハ何故ソ」¹⁰と「実記」は問う。ほぼ同じ人口を持ち、はるかに長い歴史を持ち、しかも国土ははるかに狭い日本においては、国力の貧弱さは、ただ人口の量の問題ではなく、日本と合衆国の人口における相違は、



※「ロッキー」山ノ荒原

※「実記」には、このような風景等の銅版画が309載っており、当時の状況を知る優れた手がかりとなっている。

不教ノ民ハ使ヒ難ク、無能ノ民ハ用ヲナサス、不規則ノ事業ハ効ヲミス、民力ノ多キモ、其至宝タル価ヲ生セシムルニハ、豈漫然ニシテ希望スヘキモノナランヤ”

として、人口が、合衆国の開拓に示したような力を発揮するには、教育と、そして次の文にあるように信仰が必要であると記している。

米国ノ紳士ミナ熱心ニ宗教ヲ信シ、盛ンニ小学ヲ興シ、高尚ノ学ヲ後ニシテ、普通ノ教育ヲ務ム、……済民傭奴ノ頑魯ナル、其明善ノ心ヲ啓誘スルハ、敬神ニアラサレハ不可ナリ、其学知ノ益ヲ与ヘルハ、先言語筆算物理ノ切ナルモノヨリス、生活ノ芸略定マル、之ニ規則ヲ与ヘ、之ニ功程ヲ課シテ、之ヲ監督シ、信賞必罰、躬之カヲ率テ生産ヲ興ス、故ニ民心其方向ヲ一ニシテ、富殖ノ源ヲ培養スルニヨリ、国ノ興ル勃如ナリ¹²。

ここにおいて、宗教も普通教育も、国を富ませる方法となり、なぜ“熱心ニ宗教ヲ信”じているのか、なぜ普通教育を行ない、“高尚ナ学ヲ後”にしているのか、疑問を持とうとはしない。これは、列強によって開国を迫られ、中国やインドの例をみている、そして中国やインドのようにはなるまいと決意した国の人間であれば当然の見方であるのかも知れない。

使節団は、西部の広大さに驚き、開拓の労苦に日本の前途と希望をみたのである。

2. 2 東 部

2. 2. 1 ワシントン

明治5年1月21日(陽暦1872年2月29日)使節団は、サンフランシスコを出発して約1カ月後、3196マイル、約5000kmの行程を経てワシントンに到着した。一行の宿泊予定のアーリントン・ホテルには大統領夫人からの、歓迎の花束が届けられていた。

25日には、グラント大統領にホワイトハウスにおいて謁見、合衆国民はもとより、外国人の旅行者にまで自由に見学を許しているホワイトハウスの開放性に驚いている。

謁見式は、大使・副使は衣冠の正装に帯剣して、大統領に天皇の国書を進呈し、大使、大統領がそれぞれスピーチをおこなって終わっている。¹³

27日以後、ワシントンにおける連邦政府の諸省・庁の見学が続いた。

議事堂 (Congress) については、

此堂ノ造営皎潔ニシテ、地所ノ壮美ナルコト、欧州ニテモ殆ト比類ナキ堂ナルヘシ、然レトモ周囲ノ柱椽清楚ニテ、彫刻少ク、室内ニ金色爛然人ヲ眩スル文飾ヲ為スニハ至ラス¹⁴。

「コングレス」ハ、米国最上ノ政府ニテ、大統領ハ行政ノ権ヲ総ヘ、副大統領ハ立法ノ長トナリ、大審官^{チーフジャッジ}ハ司法ノ権ヲトル、是当国聯邦政治ノ大綱ニテ、其立君国ノ体面ヲ異ニスル基本ナリ¹⁵。

と述べている。約3カ月のワシントン滞在期間中に、褒巧院「パテント・オフィス」(Patent Office)、印書局プリンギンオフィス (Printing Office)、司天台「ナショナル、オブゼルウェトリ」(National Observatory)、大蔵省「ツレージュリー」(Treasury)、郵便部「ポスト、オフィス」(Post Office)、勸農寮「アグリクリチュワル、ホール」(Agricultural Hall) 等を見

学した。こうした政府関係の見学とは別に、軍関係では、海軍造船所、陸軍電信寮、アナポリス海軍学校他、また「ソルショル・ホーム」(退役軍人のためのホーム)、黒人学校、スミソニアン学校、ポトマック河畔のワシントンの旧宅及び墓地、アーリントン墓地、リー将軍の旧宅及び墓地、癲狂院(精神病院)等を見学している。夜は、観劇、舞踏会、各レセプションに出席、条約改正の交渉も続いていた。

「実記」は、黒人学校を見学の際に、人種問題について記し、ポスト・オフィスの見学の際には郵便制度について、そしてアナポリス海軍学校見学の際に男女の交際について記している。

人種問題については、

黒人ハ、米英ニテ「ネグロ」ト呼フ、^{アフリカ}亜弗利加洲に生スル人種ニテ、容貌ノ^{ろうしがい}陋醜ナル実ニ甚シ、^{マキチハレ}頭髮ハ卷縮^{キキ}テ黒瘡ト疑ヒ、^{メノタマ}肌膚ノ漆黒ナル焦土ノ如シ、唇ハ厚ク突出シ、眼球ハ微黄ヲ帶ヒ、^{テノヒラ}手掌ニ^{ヨノツネ}ノミ尋常ノ肉色ハ存スルノミ、其生殖スル本土ハ、^{しんしん}固り榛^{しん}榛^{ひび}狂^{ひび}狂ノ域ニテ、手唇相接ノ俗ナリ、外国船ノ其地ニ至ルコトアレハ、^{はんざん}驚テ奔竄シ、怒レハ^{しとつ}驚突シ、^{りんもつ}林芥中ニ棲息スルコト、^{サル}獼猴ノ如シ¹⁶。

という読む者を驚かせる描写がある一方、奴隷制度を「悪習」¹⁷、「実ニ言語ニ断タリ」¹⁸と述べている。「実記」は奴隷制度を悪としながらも、黒人そのものに対しては、白人の優越を認めているように思われる。

しかし、黒人を教育のない者としてとらえ、

皮膚ノ色ハ、智識ニ管係ナキコトモ亦明ケシ、故ニ有志ノ人、教育ニカヲ尽シ、因テ学校ノ設ケアル所ナリ、^{おし}顧フ二十余年ノ星霜ヲ経ハ、黒人ニモ英才輩出シ、白人ノ不学ナルモノハ、役ヲ取ルニ至ラン¹⁹。

と考えた事は、逆に黒人に対しての差別感のない事をあらわしている。数百年にわたって奴隷として扱われたための無教育であるから、教育を受けさえすれば白人と対等になれるという思想は、現在からみれば、あまりにも楽観的であり単純であるといえるが、「実記」の編者は、ここでも、日本の国民の教育のなさに思いをいたし、同じ後から出発した者として黒人をとらえたのであろう。

郵便制度については、

郵便ノ仕組ハ、貿易隆盛ヲ務ムル国ニ於テハ、保民厚生ノ道ニ、最モ緊要ナル事務²⁰。

であるとしている。欧米の各都市から横浜や長崎にも送付可能であると知って、

日本ノ人ハ、西洋ヲ想像スル、^{ふきせいかん}浮槎星漢ノ如シ、西洋ノ商人ハ、世界ヲ視ルコト、一都府ノ如シ、^{あに}豈盛ナラスヤ²¹。

と感嘆している。この傾向は、現在に至るまで、郵便制度からみても続いているといえよう。

男女の交際については、

我一行横浜ニテ、米船ニ上リシヨリハ、全ク殊俗ノ域トナリ、我ノ挙動ハ、彼ノ^{めく}矚目トナリシ如クニ、彼ノ挙動モ、我ニハ怪マレタリ、其詳カナルハ、^{こうぼく}更僕モ能ク尽ス所ナラネト、其中ニ就テ、最モ奇怪ヲ覚ヘタルハ、男女ノ交際ナリ²²。

と記されており、最も理解に苦しんだ習慣であったことがうかがえる。

夫婦交際ノ状ハ、日本ニテ、婦ノ舅姑ニ事^{まにこ}へ、子ノ父母ニ事^{つか}フ所ヲ挙ケ、夫ノ我婦ニ事^{こと}フル道トナセリ、燭ヲ執^{とつ}リ履^{くつ}ヲ棒^{ぼう}ケ、食饌^{おく}ヲ饋^くリ、衣裳ヲ払^はヒ、下ルニハ扶^{たす}ケ、上ルニハ助^{たす}ク、坐ニハ榻^{こしき}ヲ進^{すす}メ、行クニハ器^きヲ奉^{ほう}ス、少シク婦ノ怒リニアヘハ、愛ヲ起^{おこ}シ、敬ヲ起^{おこ}シ、俯伏シテ之ヲ詫^わテ、猶聴^{きか}レス、室外ニ屏^{しりぞ}ケラレ、食スルコトモ得サルコトアリ、……倘^{もし}其儀則^{ぎそ}ヲ移シ、我ノ孝養ノ儀則ニカヘハ、孝道ノ進歩ヲ著シクミルニ至ルベシ²³。

というかなり皮肉ともとれるみかたをしている。ホワイトハウスにおける大統領主催の歓迎の宴の記事にも、「主賓必ス夫妻相携ヘテ席ニ臨ムヲ礼トナス」²⁴。と記されており、「婦人ハ内ヲ治メ外ヲ務メス」²⁵。という「実記」の考えとは全く相反する合衆国の習慣になじめないでいる日本の男性の姿がうきばりにされている。

黒人に対しては偏見をほとんど持たないといえる見方をしているのは、日本に同じような奴隷制度がなかったからであり、また白人に抑圧されている黒人の姿に日本という国を重ね合わせ、その将来に希望をみたかった使節団の心情に合致したからでもあったが、婦人に対しての偏見に満ちた見方は、日本においての考えをそのままあてはめた結果であるといえる。しかも合衆国においての見方も表面にあらわれた現象のみで判断しており、その本質には触れ得ていない。婦人問題は、「実記」にみる限りにおいても、根の深い問題である。

2. 2. 2 北部巡覧

使節団は5月4日より約2週間にわたって北部の各都市を巡覧する。ニューヨーク、ウエストポイント陸軍学校、オルバニー、ナイアガラ、サラトガ、ボストンを訪問し、5月17日ワシントンに戻っている。

新約克^{ニューヨーク}ノ繁華ハ、世ニ轟キタレハ、常ニ十二分ノ想像ニテ思量シタレトモ、猶モ意外ニ出ルコトソ多シ²⁶。

とニューヨークの感想を述べ、ブロードウェイやセントラルパークについて記している。

ナイアガラにおいては、ペリー提督を日本に送ったフィルモア元大統領を招き、宴を設けている。明治維新の根本原因ともいふべき鎖国を解いた人物に会った使節団の思いはどのようなものであったか、しかもそのための欧米の視察であることを考え合わせると、使節団のメンバーが、岩倉、木戸、大久保、伊藤と、維新の主要な人物であるだけに、「実記」においてはわずか2行の記事であるが、非常に興味深いものがある。

此タ元ノ大統領「フィルモア」氏を招キ、旅館ニテ夕饌ヲ供シ款待ス、嘉永癸丑^{きちう}ノ歳ニ大統領ヲ勤メ、初メテ「ペルリ」氏ヲ我邦ニ遣^{つた}シタル人ナリ、本年七十三歳ナレトモ猶^{かく}矍鑠^{しやく}ナリ²⁷。

6月17日、条約改正交渉打ち切りを決定、19日大統領に合衆国出発のあいさつをし、22日ワシントンを出発、24日フィラデルフィア、25日ニューヨーク、28日ボストンと北上し、7月3日（陽暦1872年8月6日）イギリス、リバプールへ向けてボストンを出発した。

2. 2. 3 フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン

フィラデルフィアは、1870年当時人口67万4千人の合衆国第二の都会で、製作、貿易の面でニューヨークと競っていると「実記」は記している。造幣寮「ミントハウス」Mint House、「ダラルト・コルレーチ」、「フェヤモント、パーク」、合衆国最初の議政堂、蒸気軸車の製造場、牢獄を見学している。

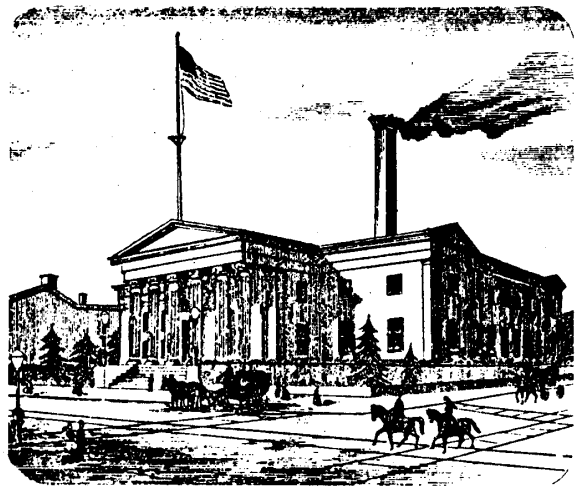
費^{ヒラデルヒヤ}拉特費ノ名タル、友愛ノ義ナリト、共和治ノ国民ハ、人ニ接スル和^{なごや}ナレトモ、殊ニ当府ノ人、尤モ交際ニ温和ヲ極ム、人気モ亦活潑ニテ、米^ミ国都会中ニ於テ殊ニ友愛ナル風俗ハ、此府ノ素意ニ基ク²⁸。

ニューヨークは、人口 134万人（「ブロックリン」と合わせて）、一年の輸出入額は7億万ドルの「米^ミ国貿易ノ心点」²⁹であった。

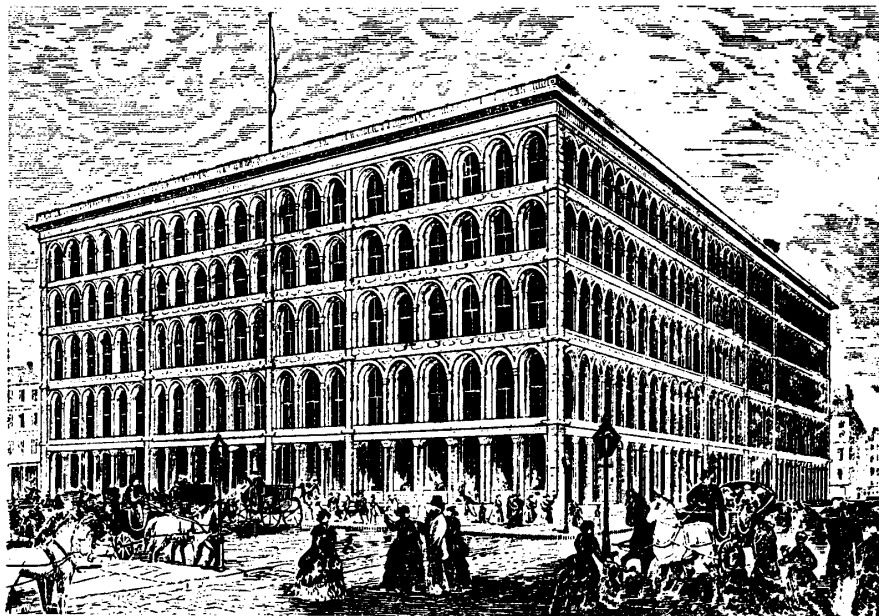
ニューヨークでは、「バイブル」会社、覽^{らん}児院（身体障害児のための病院）、「ホレホン」新聞紙局、電信会社、「シュワルト」社の商店（「布帛、綢^{ちゆうたん}緞、綾^{りよう}羅錦繡、衣服房^{せきせん}寢席氈」³⁰を扱う）等を見学している。

ニューヨークは、北部巡覧の際に一度訪れており、その繁栄に驚いているが、二度目の訪問においては、

文明ノ運ニ進ミ、自主ノ力ヲ伸ル、方今ノ世界ニ於テ、開化ノ民相競フ所ハ、非常ノ戦闘ニアラスシテ、平常ノ利益ニアリ、其昇平ノ競争ニ、勝負ヲ定ムルハ、首^{しう}ニ貿易ノ盛衰ヲミル、貿易ノ盛衰ハ、「シティー」



「ヒラデルヒヤ」ノ合衆国造幣寮



「シュワルト」社ノ商店

ノ盛衰ヲ以テ証ス³¹。

とあるように、平和時における貿易の重要性と「シティー」の役割を認識している。「シティー」については、

米国ニ於テ、毎州ノ「シティー」ハ、大抵首府ト処ヲ異ニス、首府ハ政令ノ出ル所ニテ、州ノ中枢ヲ担ム、「シティー」ハ物産ノ吐納スル処ニテ、良港要衝ニ興ル、自主ノ民ハ、政府税金ノ出納ヲ目的ニ、都府ノ繁栄ヲ謀ラサルナリ³²。

と、「シティー」と州府の区別をしている。

新聞については、「実記」は、

西洋ニテ新聞紙ノ重セラル、ヤ、以テ国、州、郡、村ノ政務ヲ規匡シ、学問究理ノ方を誘導シ、貿易富殖ニ注意ヲ与ヘ、品行風俗ノ美ヲ励マシ、独居シテ國中ノ情ニ達シ、坐シテ世界ノ景況ヲ知ル、実ニ文明ノ結果ヲ促ス、切要ノ器具ナリト謂ヘシ、左レハ新聞紙ノ価ハ、編次者ノ人品学識ニカカル、夫筆鋒ノ勢力ハ、百万ノ兵ニスク、是有識者ノ深ク意ヲ致ス所ナレハ、往往ニ政府顯官ノ右ニ出ル、卓越ノ士アリテ筆ヲトル³³。

と書き、新聞の持つ力を高圧的に、評価している。

ボストンの人口は、1870年当時25万3千人余、主な産業は、綿花、羊毛の紡績業であった。ボストンにおいては、綿花、羊毛の紡織場、上水の溜池、靴製造場、衣服製造場、金銀器の製作場等を見学し、またロードアイランド州の首府プロビデンスを訪れている。

合衆国を去るにあたって、その歓迎を感謝し、日本をふりかえって、「実記」は次のように述べている。

米国ノ人ハ、外国人ヲ視ル一家ノ如ク、交誼ニ厚キコト、同胞ニ於ルカ如シ、殊ニ波士敦ニ至リシヨリ、五日ノ間、府中及ヒ附近ノ諸邑ヨリ、親睦交誼ヲ致セルコト、最モ懇切ヲ極メタリ、出船ニ臨ミ、海口マテ送来リ、此ノ盛饗ヲ設ケシハ、実ニ東洋諸国ノ人ヲシテ、従前ヲ回想シ、慙汗背ヲ沾サシムルニ堪ヘタリ、嗚呼此開明ノ際ニ当リ、鎖国ノ宿夢ヲ醒シ、世界交際ノ和氣ニ浴センコト、我日本ニアリテハ、皆人喫緊ニ心ニ銘セサルヘカラサルナリ³⁴。

2. 3 共和政

「実記」は共和政について次のように述べている。

一千七百八十九年ヨリ、今ノ合衆聯邦治ヲハシメタリ、故ニ此国ノ人ハ、ミナ民主ノ風ニ生長シ、一視同仁ノ懷アリ、人ニ接スル真率親ミ易ク、事ニ当リ従容羈^{しやうほくさ}レス、真ニ天地ノ公民ナリ、其弊ハ、官威上ニ輕ク、法度ニ活機ヲ失ヒ、人人各私権ヲ張り、苞苴官ニ行ハレ、公党下ニ軌ノ憂ナキ能ハス、但米国人ハ、此風ニ浸潤セルノ久シキ、純然タル民主ノ域トナリ、復君主ノ治ヲ以テ、其和平ヲ希フベカラザルナリ³⁵。

論理ヲ尽シ、日月ヲ経テ、商定セル憲法ナレハ、其良善ヲ尽シ、人心ニ入ルコト、猶天教ヲ奉戴スルカ如ク、于^{いまに}今九十六年、三十七州ノ多ヲ致シテモ、敢テ違戾スルコトナシ、然トモ各州ニテ自主ノ権義ヲ張り、大統領ノ権ヲ抑ヘ、民ニ党論ノ盛ナルコトハ、亦年ヲ逐テ増長ス、

歐洲立君国ノ人人ハ、傍觀シテ米國ノ民カ、昇平ノ日ニ戰鬪スルヲ笑ヒ、共和國ノ民ナラサルヲ幸トスルトナリ、固リ人爲ノ法ニ、完全ノモノアルヘカラス、人民ニ伸ヘハ、政府ニ縮ム、自由ニ切ナレハ、法度ニ慢ナル、一得一失、理ノ自然ナリ、米國ノ民ハ、此政中ニ化育セラレ、百年ニ垂レタレハ、三尺ノ童モ亦君主ヲ奉スルヲ恥ツ、習慣常ヲナシ、其弊ヲ知ラサルノミナラス、只其美ヲ愛シ、世界ヲ挙テ、己ノ国是ニ就シメントス、……到底其意想ノ移スヘカラサル、純乎タル共和国ノ生靈ナリ³⁶。

米國ハ、歐洲人民ノ開墾地ナリ、歐洲ニテ自主ノ精神ニ逞シキ人、己カ不羈獨立ノ智力ヲノベ、新ニ一大生業ヲ興サント志セハ、其游刃余リアル、米國ノ広土ニ向ヒテ、開墾ヲ試ム、是此國ノ開ケシ原由ニテ、……英國ノ屬地タリシトキヨリ、己ニ此國ハ自主民ノ移主營業場トナリシヲ以テ、歐洲自主ノ精神、特ニ此地ニ鐘リ、其事業モ自ラ卓落豁達ニテ、氣力甚タ旺ナリ、…合衆聯邦ノ制ヲ以テ、一箇ノ民主國トナリ、州、郡、村、市、社会ノ間ニ、自主ノ力ヲ用フル自在ニテ、益歐洲人民ノ營業ヲ起ス地トナリシハ、是其開墾ノ功ヲ進ムル、駸駸トシテ甚タ盛ナル所以ナリ、自主ノ論ト、共和ノ議トハ、歐洲ニモ充チタレトモ、多ク理上ノ談ニテ、其國ノ實際ニ適セス、只米國ハ純粹ノ自主民集リテ、其ノ共和國ヲナス、其由来スル所ハ、固リ開國ノ元素ヨリス³⁷。

此驚クヘキ國利ヲ増進シタルハ、他ニ比類ナキ所ニテ、其能ク然ルヲ致ス所以ヲ推究スレハ、其首領トナル士君子カ、自主ノ精神、他ニ優レ、實用ノ學術ヲ教ヘタル功ナリ、此自主力ナルモノハ、在来ノ米人ニ固有セルニアラス、又米國ノ空氣に含蓄セルニアラス、是ミナ歐洲ヨリ移住スル民ト、共ニ輸入シタルナリ、蓋シ歐洲ノ移民ハ、外面ヨリ之ヲ謂ヘハ、逋逃ノ數、無賴ノ群トモ謂フヘシ、然トモ其中ニ於テ、財産智巧人ニ超ヘ、本國ノ生理ヲ狹隘トシ、其政治ヲ編陋トシテ、米國ノ広土ト、自主ノ風トニ、其卓落ノ精神ヲ、十分ニ展ヘンコトヲ志シテ来ルモノアリ、此等ノ人ニテ、其逋逃賴類ヲ教育約束シテ、力ヲ開拓ニ用フルニヨリ、其成功ノ非常ニ著シキヲ見ル所ナリ、故ニ米國ハ之ヲ歐洲自主民ノ開拓地ナリト謂フヘシ³⁸。

これらの文章から、「実記」は、共和政を合衆国の主要な特徴としてとらえていることは明らかである。共和政を、また共和政を支える“自主ノ精神”を、合衆国をユニークたらしめている制度、現象の一つとして考えているといえる。さらに、使節団のとらえた共和政とは、リーダーとリーダーに従う人達との区別のあることも指摘できる。つまり、支配階級の人々は、人格も優れ、教養を身につけ、財産もあり、神を信じる立派な人間であるが、被支配階級の人々は、貧しく、教養もなく、特に新しく移民として合衆国に到着したばかりの人々に対しては、「実記」は、「懶惰、頑民」³⁹、「世界徒流ノ民」⁴⁰と厳しくきめつけている。ヨーロッパにおいて優れた人々が合衆国に来て、その自主の精神を用い、これら人々に対して教育を行なうことによって国を発展させたのであって、自由についても支配階級の人々の自由は、羨むほどであるが、「貧漢小民」⁴¹の自由は、秩序を乱し、風俗をみだすとしている。⁴²

一方、2.2.1 でみたように人種問題に関しては、比較的平等の立場をとり得ている使節団は、結局は、二つの視点を持っていたと考えられる。一つはあくまで列強に対峙し、近代化の遅れを

取り戻すべく、西洋の文化を全面的に肯定し、西洋の思想をすべて正しいとする視点である。この視点からは、特に貿易等の、国を富ませる手段をすべて受け入れ、外国人をも家族のようにしてもてなす友好的な態度に心から感謝し、同じ遅れをとっている存在や、弱く小さな存在に対しては同情的である。もう一つの視点は、自ずからを支配階級におく視点である。この視点からは、新聞も教育も共和政も、次に述べる宗教も支配の原則に従って取捨選択される。つまり、第一の視点では肯定され、受け入れられる思想や制度も、第二の視点によってふるいにかけられ、あるいは全く違う観点からみられることになるのである。

たとえば、「実記」には、「夢中ニ二千年ヲ経過シタリ」⁴³ とか、「嗚乎此開明ノ際ニ当リ、鎖国ノ宿夢ヲ醒シ、世界交際ノ和氣ニ浴センコト」⁴⁴ とか、「自己ノ權利ヲ重ンスルモノハ、他人ノ權利ヲ妨ケルナシ、是自主ノ本領ニテ」⁴⁵ のように、率直に日本を世界の一員とみなし、近代化の道を歩もうとする姿勢と同時に、

自己ノ天良ニヨリ、自主ノ精神ヲ養成セハ、到ル処ミナ我不動産ヲオクヘキ地ナリ⁴⁶。
のように、早くも帝国主義的ともとれる発想を、“自主ノ精神”と結びつけている箇所も見出すことができるのである。この場合、“世界”とはヨーロッパ及びアメリカ合衆国をさすことになるのはいうまでもない。

また、共和政のマイナス面を、特に州政府の自治、ひいては民衆一人一人の自由にあるとみていることも、第二の視点からの考えであり、裏返せば、強力な中央集権国家の肯定となり、明治以降の日本政府のあり方を示唆しているとも考えられるのである。

以上の二つの視点から、使節団は、連邦政治と民主制を合衆国の建国の理念とし、その発揮した力を評価しながらも、日本の進むべき道を他に求めたのである。

2. 4 キリスト教

キリスト教の教義に関しては、「実記」は、「一部荒唐ノ談ナルノミ」⁴⁷として、全く意に介していない。キリストを「死囚」⁴⁸と呼び、キリストの復活を「^{うつろ}瘋癲ノ^{めいご}讒言」⁴⁹と記している。しかし、西洋におけるキリスト教の力は認めざるを得ない。特に信仰による実践の面においては、
基督^{キリスト}ノ教ハ、奇怪モ亦多シ、我若シ論ヲ以テ之ヲ屈セハ、彼徒ニ答ヲ失ワシメルコト、必モ明^{かならずし}識ノ士ヲ俟サルナリ、但其ノ実行ノ篤^{あつ}キニ至テハ、我ニ於テ慙色アルヲ免レス⁵⁰。村アレハ寺アリ、群アレハ会アリ、論高カラサルモ守ルニ篤ク、説怪ナルモ信スルニ誠ナリ⁵¹。
と高く評価している。

「実記」は、宗教における実践面の重要性を何度も強調している。

宗教ハ、形状ト論説トヲ以テ弁論シ難シ、所謂実行ノ如何ヲ顧ルノミ⁵²。

則論説ノ高妙ニ驚センヨリハ、寧^{むし}口持行ノ誠実ナルヲ尊フナリ⁵³。

宗教ニ尊フヘキハ、実行ニアリ、弁論ニアラサレハナリ⁵⁴。

そして、その実践面で、また教義に通じている面で、東洋と比較してより優れているキリスト教を認めているのである。実践をこのように強調する理由は、

抑モ人民敬神ノ心ハ、勉励ノ本根ニテ、品行ノ良ハ、治安ノ原素ナリ、国ノ富強ノ、因テ生スル所モ此ニアリ⁵⁵。

蓋シ人ニ道ノ揆ナキトキハ、守ル法モナカルヘシ⁵⁶。

とあるように、信仰をも国を富ませるための必要条件と考えたのである。従って、キリスト教とは一体どのような宗教なのか、なぜその宗教を信ずるが故に、1620年に母国を去り、厳しいニューイングランドの地に開拓を始めなければならなかったのか、なぜキリスト教が、建国理念である“自主ノ精神”の基礎となっているのか、キリスト教が合衆国建国の際にどのような動きをしたのか、あるいは、合衆国の建国理念である“自主ノ精神”とはどこからきたものなのか、なぜ、合衆国の人々は、どのような人もみな“一視同仁”とみなすのか、というさまざまな疑問に、使節団は思いをいたすことをしなかったのである。信仰の内容よりは、支配の視点からの実践面のみが有効として宗教を受け入れたのである。

2. 5 岩倉使節団のアメリカ合衆国観

「実記」にみられる使節団のアメリカ合衆国の観察は、目に見えるものに対しては、その必然性と熱心の故に、ほぼ適確にその本質をつかみ得たといえるであろう。開拓の成果にしる、「シティー」の繁栄にしる、貿易の重要性にしる、情報過多ともいえる現代にあってと大差ない把握のしかたをみせている。しかし、一方目に見えないものに対しては、ほとんど注意を払っていない。

「実記」によれば、合衆国は、富に満ち、活気に満ち、友好の厚い、広大な国であった。どちらかといえば、理解の範囲を超える（使節団は、この後ヨーロッパ諸国を巡り、ますます君主政をよしとしている）共和政の、若々しい国であった。そしてそれ以上には、合衆国を理解することはなかったのである。

使節団の使命は、可能な限りの短期間において、近代国家の体裁をととのえることであり、“目に見えないもの”に対して注意を払う余裕はなかった。列強も、日本が近代国家として成熟するのを待つはずはなかった。こうして、岩倉使節団という一つのグループがとった、外国への対し方、外国を理解する方法が、現在からみれば、その後の日本が外国と対する時の典型的な態度となり、方法となったのである。

注1. 前出 米欧回覧実記一 p. 79

2. 同上

3. 同上 p. 82

4. 同上 p. 114

5. 同上 p. 135

6. 同上 p. 155

7. 同上 p. 154

8. 同上 p. 160

9. 同上 pp. 161-162

10. 同上 p. 162

11. 同上

12. 同上 p. 163

13. 同上 pp. 385-386

14. 同上 pp. 206-207

15. 同上 p. 207

16. 同上 p. 214

17. 同上

18. 同上 p. 215

19. 同上 p. 216

20. 同上 p. 238

- | | |
|--------------------|---------------|
| 21. 同上 p. 246 | 39. 同上 p. 69 |
| 22. 同上 p. 248 | 40. 同上 p. 357 |
| 23. 同上 | 41. 同上 p. 330 |
| 24. 同上 p. 210 | 42. 同上 p. 330 |
| 25. 同上 p. 248 | 43. 同上 p. 163 |
| 26. 同上 p. 257 | 44. 同上 p. 369 |
| 27. 同上 p. 287 | 45. 同上 p. 336 |
| 28. 同上 p. 329 | 46. 同上 p. 246 |
| 29. 同上 p. 340 | 47. 同上 p. 343 |
| 30. 同上 p. 346 | 48. 同上 |
| 31. 同上 p. 337 | 49. 同上 |
| 32. 同上 | 50. 同上 p. 344 |
| 33. 同上 p. 348 | 51. 同上 |
| 34. 同上 pp. 368-369 | 52. 同上 p. 343 |
| 35. 同上 p. 52 | 53. 同上 |
| 36. 同上 pp. 207-208 | 54. 同上 p. 344 |
| 37. 同上 p. 243 | 55. 同上 p. 342 |
| 38. 同上 p. 245 | 56. 同上 |

参 考 文 献

- 岩倉使節団 田中彰著 東京 講談社 昭和52
世界資本主義と明治維新 中村哲著 東京 青木書店 1978
日本近代国家の形成 原口清著 東京 岩波書店 1968
明治維新私論 松浦玲著 東京 現代評論社 1979
岩波講座日本歴史 14 大石嘉一郎他著 東京 岩波書店 1975
民衆のアメリカ史 ジン・ハワード著 富田虎男訳 TBSブリタニカ 1982
フロンティアの遺産 R.A.ピリンソン著 渡辺真治訳 研究社 1971
アメリカ人民の歴史 レオ・ヒューバーマン著 小林良正、雪山慶正訳 岩波書店 1981
アメリカの歴史 サムエル・エリオット・モリスン著 斎藤光他訳 集英社 1971
世界の女性史 9 本間長世編 評論社 1976
西部開拓史 猿谷要著 岩波書店 1982
岩波講座世界歴史 18、19、20 岩波書店 1970-71